思い出

センター研究員（東京大学大学院教育学研究科教授）　近　藤　邦　夫

2002．2．9

このように胸に花飾りをつけて，お褒めの言葉をたくさんいただいて…ずいぶん昔の結婚式の日以来のことで，少々戸惑っています。

私は別に大したことをしてきた人間ではないし，最終講義とかパーティーとか，そういうことをしないで静かにひっそりと立ち去っていきたいと，心の中ではっきりと決意を固めておりました。しかし，そういうことを佐藤学さんに言いましたら，「それでは私たちが困ります！」と言われ，だいぶ考えたのですが，去年の暮れくらいになってから，「じゃあ，なるべくこぢんまりとしてもらえないだろうか。それだったら私もあんまり恥ずかしさを感じないでいられるから…」と我がままなお願いをしました。そのために，本来は声をかけなければならない方にも声をかけない等の失礼を，いろいろな方にしたと思いますが，どうかご容赦をお願いしたいと思います。

今日はですね，私なりに最後の講義をしてみたいと思います。

実際には最終講義ということを考えていなかったので，「じゃあ何をするのかなあ？」と去年の末から考え始めました。今まで先輩の先生方がされた最終講義のことを振り返り，先輩方は若い人たちに伝え残しておきたいことを語っていたなあと思い出して，「じゃあ私の場合には，何を語り残していきたいのだろう？」と考えてみました。しかし，それについて考えに考えた挙げ句に分かったことは，「そういうことは何にもない」ということでした。自分でもびっくりしました。

ここ数年，学校臨床心理学とか学校臨床という分野で，私が若い人たちに伝えたいと思うことを一生懸命伝えようとしてきて，同時にそれが何にも伝わっていないという現実に直面して苛立ちや焦りを募らせてきたので，私の中には彼らに伝え残していきたいことはたくさんあると思っていたのですが，いざそれを探ってみると，「何もない」ということに気づいて，びっくりしました。

その感じをあえて言葉にすると，私がこれまで若い人たちに伝えたいと思ってきたことは，実は「私がしたいこと」「私がしたかったこと」あるいは「私が私に対して望んできたこと」であって，それは私の研究者としての生活の終焉とともに環を閉じるものなんだ，という気づきと言っていいでしょうか。英語にcycle completedという言葉があります。例えば，エリクソンのライフサイクル・コンプリーテッドという言葉は，生まれおちた時から描き始められた人生の環が老年期に至って死を迎えた時に閉じる（完結する）という意味ですが，それと恐らく同じように，私の研究も，私の研究者としての生活の終焉とともに環を閉じるのであって，それは人にしてほしいと願ったり，伝え残していくものではないのだ。そのような感じで，「言い残しておくことは何もない」という気持ちになったんだと思います。

変な話ですが，こんな感じを前にも抱いたことがあるなあと考えていたら，今から30年ほど前に父親が亡くなった後に同じようなことを感じたことを思い出しました。亡くなった直後は，父親の人生が途中でプツンと切れてしまった感じでとても悲しかったのですが，しばらくしてから，ある時，フト，「親父の人生はあそこでプツンと切れたのではなくて，あそこで環が閉じて，完結したんだ！」という思いが湧いてきて，気持ちが落ち着いたことがありました。もしかしたらその時の感じと，今，私自身に対して感じることは同じなのかもしれないとも思います。

三つの思い出

しかし，若い人たちに伝え残していくものが何もないとなると，最終講義として何を話したらいいのだろう？と，しばらく悩みました。それでは「私に話せることって，何だろう？」と考えてみると，私は最近次第に老人らしくなってきて，思い出ばっかり語ってる，思い出な

ここに掲載する文章は，当学校臨床総合教育研究センターの初代センター長であった近藤邦夫先生の最終講義の記録である。近藤先生は，当センターの創設に尽力され，今日のセンターの諸活動の礎を築かれた，われわれ現在のスタッフにとって，かけがえのない先輩である。2002年2月9日に，教育学部156教室で開催された最終講義をテープ起こしし，近藤先生自身に加筆修正していただいたものが本稿である。

ら語れる，いくらでも語れるのではないかと，はたと気がつきました。しかし，今，佐藤学さんが言われたように「思い出」というような題の最終講義をした人はいないなあ，参ったなあ，そんな講義でいいのかなあと迷ってもいました。その時，今日の講義やパーティの準備を中心になって担ってくれた学生の高岡さんが,「先生の最終講義のタイトルなんですか？」と尋ねてきました。「一応『思い出』という題にしようと思ってるんだけど，おかしいですかねえ？」とメールで打診しましたら，すぐに「素敵な題だと私は思いますよ」という温かい返信がきました。それに支えられて,「思い出」を語ることにしました。

私が心理臨床の領域に入ってから，そして教職についてからの生活の中で，自分の心の中に何が一番残っているんだろうかと，頭をまっさらにして，心の中に湧いて来るものを探ってみると，浮かんできたことは三つありました。

第一の思い出，第二の思い出

先ず浮かんできたのは，私自身が教師としてうまく付き合うことのできなかった学生たちの顔でした。学生を傷つけただろうし，私も傷ついたと思う学生さんたちの顔が浮かんできました。同時に，一人だけ教え子の中で，私が関わりながら，自殺することを食い止められなかった方がいらして，その人の顔が浮かんできました。教師にとってこういう経験は，傷口が開いたまま癒されることはないのだということを改めて思い知らされました。

これらは私の教師としての無能さを最も鋭く突きつけてくる事柄なのですが，この，教師としての自分に対する劣等感と無能感は，教師生活を続けてきたこの最後の時まで結局消えることはなかったのだということも，改めて思い知らされました。学校現場の先生方の実践を見る時，私はいつも「私にはとても難しくって出来ないことが，彼らにはどうしてできるんだろうか？」という目で見てきたと思いますが，その基底には，この，教師としての自分に対する劣等感と無能感があったのだと思います。

第二に浮かんできたものは，千葉大時代に出会ったある男の先生でした。

私にとっては全く未知の先生が，ある日，突然相談にやってきました。30才前後の男の先生で，小学校５年生の担任の先生でした。クラスの男児についての相談でした。２年生か３年生頃から不登校を続けていて，家庭はお父さんと２人のお姉さんと彼の４人家族。お父さんの職業はパチプロで，どうもお母さんは愛想をつかして逃げ出してしまったらしい。六畳一間のアパートに家族４人が生活している状況でした。子どもが学校に来ていないので，５年生から担任になったその先生は恐らくその子の顔も知らなかったのでしょう。とりあえず顔だけでも合わせたいと思って，毎朝，車でその子の家に寄って，アパートのドアをたたくのだけど，一家四人全員寝ているという感じで，起きてきてくれない。何の反応もないという状態が続いていたようでした。

彼が私のところに相談にやってきたのは,「お父さんが息子を何とかしようという気持ちになってくれないと困る」「だから，何とかお父さんを呼びだして，説得したい」「それにはどうしたらいいのか？」を聞きたいということでした。詳しいことを語っていると長くなってしまうので，端折りますが，私がその時に最終的に伝えたことは,「お父さんを説得することはなかなか難しいのではないか」「先生がお父さんを説得するということは，お父さんのパチプロとしての生き方そのものを変えろという要求になりがちだし，それは，お父さんにとってもなかなか受け入れがたい」「そのようなことになれば，お父さんとの間で先生が味わう経験は，自分の思いがお父さんに伝わらずイライラするばかりということにならないか？」「それを覚悟して，子どもにも関わり，同時にお父さんにも関わるというエネルギーの余裕が先生にあるか？」ということでした。そして,「そのような余裕はないかもしれない」「関わりの焦点を，子どもかあるいは父親のどちらかに絞るとしたら，子どものほうに関わりたい」という先生の応答を聞いて，その時に私が提案したことは次のようなことでした。「それならば，お父さんに関わることは諦めませんか？お父さんのあり方には目をつぶって，何の要求もしないで，子どもだけに関わることにしませんか？そのほうが先生もエネルギーが長続きすると思いますが」ということでした。

その後，彼は，毎日子どもの家を訪問していたようでした。ドアーの前で声をかけると，少しずつ，ゴソゴソと室内で人が動く音がしたり，玄関の横の窓を少し開けて先生の顔を見たりという動きが出てくるのですが，なかなかそれ以上に発展しないという状態が続きました。ある日，夜の10時頃，先生が学校の帰りに子どもの家に立ち寄るんですね。しかし，部屋の電気は消えていて，誰もいない。「じゃあ誰か帰ってくるまで待ってようか」と，アパートの横の道路に車を止めて待っていました。しばらくすると，道路の向こうの方から，小柄なからだのその子が，恐らく，お父さんやお姉ちゃんたちの夜食の弁当とか，次の日の食材をいっぱい詰め込んだ大きな

ビニール袋を両手に持って，地面を引きずるようにトボトボと暗い街灯のもとを歩いてくる姿が見えてくる。先生はそれを見て，車の中で号泣してしまうんですね。「ああ，こういう生活をこの子はしていたのか！」と感じて。しかし，嗚咽をぐっと抑えて，その子が車の横を通って，家に入っていくのをじーっと見送るという出来事があったのだそうです。

その後，どういうわけか，事態が少しづつ進展し始めます。恐らく，先生がドアーの外でかける声のトーンや，かける言葉の内容が微妙に変わったのだと思います。アパートを訪ねた時に，子どもが少しドアーを開けてくれたり，ドアーを開けて出てきてくれたり，そこで話ができたり，やがて学校に出てきてくれたり…と。信じられないことだったのですが，6年生になってからは毎日登校してきて，最後には学級委員になるということも起こりました。

そして，6年生の夏休み，私たちの世代では林間学校とか臨海学校とか言われるものがありましたが，それと同じようなものがあって，子ども達が全員，朝早く校庭に集まってバスに乗るのを待っている。みんな揃ったかなーっと確認をしている時に，校門から大人の男性が一人でトコトコと歩いてくる姿が見える。背広を着て，ネクタイを締めて，歩いてきて，その先生の前にやってきて，深々と頭を下げて，挨拶をする。「私が○○の父親です。先生には，子どもが大変お世話になりました。親にも出来ないことをしてもらいました。何とお礼を言ったらいいか，何とお詫びを言ったらいいか，言葉が見つからない…」と，土下座をするような感じで先生に言ったらしいのです。その時の喜びを，先生は私のところにやってきて，目を輝かせて語ってくれました。それが恐らく彼と会った二回目のことだったと思います。

そこで終われば万々歳なのですが，その2年後くらいにその先生が突然訪ねてきました。この先生の記憶が，20数年ほど経った今でも，こんなに強烈に私の胸の中に残っているのは，この時の訪問があったからだと思います。中学校に入学してから，その子が悪い子の仲間に入って，たばこを吸ったり，万引きをしたりしていることをあるとき知った。彼に対して「今の私に，何が出来るのかを知りたい，教えて欲しい」という相談でした。しかし，先生が私の前で最も語りたかったことは，同時に，「私がしたことは何だったのか？」「あんなに力を注いでも，彼の中に何も残せなかったのか！」という落胆だったのだと思います。恐らく一人では抱えきれなくなって誰かに語りたかったのだと思います。私の目から見るとその子の思春期の混乱は，5，6年生の頃のこの担任の努力があったので，この程度で済んでるというか，それがなければもっと大きな混乱をしただろうけど，この程度の混乱で済んでるところにこの先生の貢献があったと思えるものでした。そのことを先生には伝えましたが，でもそれはなかなか伝わらない。先生の心の中では「あんなに努力したのに全てが水泡に帰してしまった」という失望と落胆と徒労感が圧倒的に大きく広がっているようでした。私は一生懸命慰めましたが，彼の落胆は消えず，肩を落として私の部屋を出ていかれました。私の胸の中に浮んできた第二のシーンは，この先生のこの時の後ろ姿でした。

学校の先生たちというのは，こういうやりきれない思いを抱えながら生きていく人たちなのだということに，恐らく私が初めて痛烈に出くわした出来事だったのだと思います。

第三の思い出：ある少年との出会い

第三に浮かんできたことは，大学院生時代に私がプレイルームで会ったある少年（小学校5年生）のことでした。

修士課程の3年目，ある先輩が急に留学することになったので，精神科の病院のバイトを「お前やれ」と任されました。週2日で，心理テストが主な仕事で，ロールシャッハ等のテストをやっていましたが，時々「面接をしてほしい」という依頼が医師からあれば面接をするという仕事でした。

心理室といっても，木造3階建ての病院の屋根裏部屋で，夏はもう暑くてしょうがないところだったのですが，ある夏の日，暑くてボーッとしていると，下から看護婦さんがバタバタと大きな音をたてて階段を上ってきました。「外来の待合室で大変な騒ぎが起こっている」「先生来て鎮めてください」と言われたんですね。手を引っ張られるようにして待合室まで行ってみると，ある少年が，泣きわめいて暴れ回っている。灰皿を投げたり雑誌を投げたり椅子を投げたりしていて，20人くらいの患者さんが遠巻きに，怖がって，それを見守っている。私はまだそのような状況に対処する力を持っているわけではないし，内心「困ったなあ」と思いながら，とりあえず，泣いて怒って混乱して，何かを喚いている彼のかたわらに座って，彼が何を言いたいのか，恐らく2，30分くらい聞いていたと思うんですけど…。

でも彼が何を言いたいのかなかなか分からなくて，しかし少し落ち着いてきたので，「ここでは，十分に君の話が聞けないから，3階の僕の部屋に行って話をしてくれる？」と言ったら，その子が，「そんなところに行ったら

先生に誘拐されちゃう！」と叫ぶわけです。「じゃあ，(弟さんとお母さんが一緒に来てましたので)，お母さんも君も弟さんも一緒に行ったらどう？」と，なんとかなだめて，私の部屋に来てもらいました。そこでもワーッと泣きながら，混乱しながら何かを喚くわけですね。泣きじゃくりながら，しゃくりあげながら語る言葉は，なかなか分からない。でも1時間ほどたったあとにやっと分かってきたことは，何ヶ月か前にトラックに弟がはねられるという事件があったこと，しかしトラックの運転手は「兄が弟をトラックの前に突き飛ばしたんだ」と言い張ったこと，それに対して彼は「僕はそんなことはしない，人間はみなそんなふうに嘘をつくんだ！」と訴えているということでした。実は，最初からそれをずっと訴え続けていたようでした。

後から詳しく聞くと，彼は小学校5年生で，「外に出ると誘拐される」と言って外に出ない，学校に行かない，やむを得ない用で家を出ても，路上やバスの中などで「あの人が僕を変な目で見た」と，カーッとなって暴れ始める。同時に，2，3年前に死んだおばあちゃんの声が聞こえるという症状もあって，担当の医師は，小児分裂病を疑っていました。生育史を聞いてみると，家族の長男として生まれたのですが，父方の祖母が，「この子を育てることを嫁に任せることは出来ない」と言って，子育てを自分が全部引き受けるのですが，彼女自身は病弱で，離れに寝たきりなんですね。だから彼は，生まれた時から，恐らく祖母が死ぬまで，つまり小学校2年生か3年生くらいまで，祖母のまわりでうろうろして，友達と接触することもあまりなかった。だから祖母が死んだ後，母親は初めて彼の面倒を見るわけですが，とても自分の子どもとは思えない。「おばあちゃんの声が聞こえる」という症状は，彼にとっては唯一の支えであった祖母の存在を取り戻そうとする切ない試みとして理解できるとも思いました。

ところで，泣きわめきながら彼が語ろうとしてきたことをやっと受け取った後，私は，「君が言おうとしていたことは分かったけど，君の気持ちをもっと時間をかけてゆっくり聞きたいので，毎週○曜日，東大の相談室というところに僕はいるから，そこに通ってきてくれないか」とお願いしました。しかし，そこでも，「そんなところに行ったら先生に誘拐されちゃう」と言うので，「じゃあ今日ここでやったのと同じように，お母さんも弟さんも一緒にきて，プレイルームで遊んでいる間もずーっとお母さんや弟さんとも一緒ということではどう？」と提案し，やっと納得してもらえました。

プレイルームでの出会い

次の週，果たして彼は来談してくれるだろうかと心配していましたが，嬉しいことに，やってきてくれました。実は，前の晩から，おもちゃの手錠でお母さんと自分の手を結び，相談室にくる間，バスに乗ってる間も，プレイルームに入ってからも，手錠でお母さんと自分を結び続けていました。「先生に誘拐されないために」ということのようでした。彼が感じていた不安の深さをひしひしと感じさせられる姿でした。プレイルームに入ってしばらくたった後，ぶつぶつつぶやきながら少し動き始めました。鎖鎌でお母さんの体をぐるぐる巻きにしたり，お母さんに斬りつけようとしたり，ピストルやライフルを床に投げ出して，「鉄砲魚だ！」と，ボソッとつぶやいたり。

しばらくして，恐る恐る手錠を解いた彼が，今度は，ビクビク震える様子で，「なんか物騒だ…なんかおかしい…なんか物騒だ！」と言いながら，床を見回しています。私と視線をまったく合わせず，ウロウロ，キョロキョロと，どうにも落ち着けないという様子で。「どうしたの？」と聞くと，「ここ（床）から草が生えてくる」と，一生懸命，鎖鎌で草を刈る仕草をしています。全部刈り終わると，彼は刈り取った草を一カ所に集めて，マッチで火をつける真似をし，手をかざすのですが，「寒い，寒い」と，ブルブル震えています。さらに，「また草が生えてきた！」「さっきは根っこまで全部引き抜かなかったから駄目なんだ！」とつぶやいて，草を引き抜く仕草を始めます。この作業をできるだけビビッドに経験できるようにと，私が床一面に箱庭用の木を置くと，力を入れて，根っこまで全部引き抜く仕草をし，刈り取った草を集めて再び火を付け，今度は，「あー暑い！」と汗を拭いています。

そのあと，しばし手持ちぶさたの時間が流れた後，彼はおもむろに箱庭に近づき，次のような情景を作りました（図1　箱庭1）。

砂漠に飛行機が不時着し，乗客たちがバスに乗って，水を求めてさまようが，砂嵐に襲われてみんな死んでしまうという情景…。彼がその後も繰り返し描いた情景です。私は普段はそんなに優しいことはしないのですが，この時ばかりは何とも言えず切なくなって，左上隅の砂を掘って水場を作り，「ここにオアシスがあるよ」「水があるよ」と伝えます。彼はバスでそこに近づき，水があることを発見するのですが，「先生，違うよ，これは蜃気楼だよ！」と言いながら，水場を砂で埋め，再び，人間たちがさまよって死んでしまうという物語を繰り返していました。

乾ききった砂漠の中で，水を求める人間が，水を探し出せずに死んでしまうという情景は，プレイルームの中で，子どもが，最初の時点で，しばしば表現する世界であると思いますが，この時の彼の「蜃気楼」という表現は私には極めて深い印象を残しました。「これは蜃気楼だ」と言って彼が水場を砂で埋めたこと自体は，彼のとても切ない世界を表すものですが，蜃気楼という言葉を聞いた瞬間に，私の心の中では，この子と歯車が噛み合うカチッという音がしたような気がしました。disillusionというか，大切な夢が壊れて生々しい現実に直面するというテーマは，実は，私にとっては極めて心を揺さぶられるテーマ，私自身の心に響く内的テーマなので。

さきほどお話しした先生，小学校6年までに子どもが何とか立ち直って，小学校を送り出したけれど，中学校2年生になったときにまた崩れている彼を知ってすごく落胆したという先生が，私の心の中に深く残っていたのも，恐らく，私の中のそういう「夢が崩れる」「まぼろしから醒める」というテーマに，すごく響いたものを感じたからだと思います。同じように，この少年が「これは蜃気楼だった！」と，オアシスの存在をうち消した時に，私は，何と言ったら良いのですかね，「あっ，この少年とやっていける！」，そう思いました。

希望をうち消すこの種のテーマは，その後何回も出てきました。「箱の中に飛行機が何機も墜落し，みんなが砂漠の中を水を求めてさまよっているんだけど，すべて砂嵐に巻き込まれて埋まってしまう」場面，水道の水を激しく出して，そこに象のおもちゃを置き，「流れが速すぎるので象でも溺死してしまう」場面，「砂漠で，動物たちが水を求めてさまよってきたけど，砂嵐に埋まって死に絶えてしまう」というような場面を，何遍も何遍も繰り返して表現していました。

子どもがこのような世界に生きている時，あるいは子どもがこのような構図で自分の世界を表現する時期を，私はプレイセラピーの第一期と考えてきました。砂嵐とか嵐のように，「捉え難いもの」「摑みがたいもの」に襲われ，しかも子どもは全く無力でそれに対抗し得ないという表現をする時期です。もっとも，襲ってくるものが，「砂嵐」とか「嵐」のような，漠とした，形にならないものとして表現されることと，襲ってくるものに対して子どもが無力であるということは，分けることのできない，一つのセットになった，configurationalなものなのでしょう。自分の力では抗しきれない圧倒的な力に襲われているという無力感と，襲いかかってくる力が何であるかが「摑めない」「分からない」「見えない」という不可解感は，一つの事象の両面をあらわすように思えるからです。この時期の子どものこういう表現は，何かに自分の存在が潰されているのだけれど，それが何であるか摑めないという，子どもにとって最も辛い状況をあらわしているように思えます。

この少年は，この第一期の終わり頃に，次のような箱庭を作りました（図2　箱庭2）。

中央に二つの山がある。お母さんの乳房のような山なんですが，その上では鹿がライオンに食べられている。しかし，上方にいる鹿は，ライオンから逃げている。左下にいるゴリラは，数頭の鹿を引き連れて，ライオンに捕まった鹿の救援に行こうとしている。それまでは，捉えがたい何かに襲われて，それに対して何のディフェンスも出来なかった彼の世界の中に，「逃げる」「救援に来てくれる存在があらわれる」という新しい動きが生じていることが分かります。

左上の隅の柵の中には人間がぎっしりと詰め込まれていますが，これは（3回目からプレイに加わった）弟が，無理矢理，箱庭の作業の中に割り込んできて作ったものです。ところが，いつもなら，弟と争いになると，まるで勝負にならずに，負け犬のように部屋の隅っこに逃げて，からだをすくめてしまう彼だったのですが，この時ばかりは，「人間はだめだ！」「人間を入れるな！」と，それらを放り出し，弟が再度人間を置くと，それらを全て砂の中に埋めてしまいます。その後，この世界に突然巨大なゴジラが侵入し，全てを砂の中に埋めてしまうのですが，前述のゴリラが奮戦し，何とかゴジラと戦って，勝利を得て，平和が訪れ，砂の中に埋められたものを助け出すのですが，人間だけは助けません。人間に対する彼の怒りと不信感が根深いものであることがひしひしと感じられました。

左下の隅，ここは，最初はバクが人間の作った罠にはまって落ちていた穴だったのですが，平和が訪れた後，彼はそこに水を入れ，ボートを浮かべ，ボートの中にゴリラを乗せて，「ゴリラがひなたぼっこをしている」場面を作り，まるで自分がゴリラになったかのように，ふーっと息をついて，ひなたぼっこをするような仕草をします。未だ人間への根深い不信感が残っているとはいえ，彼の世界の中に，このような，ゆったりとした，穏やかで，温かい空間が生まれたことは，私にとっては，とても嬉しいことでした。

挑戦へ

「得体の知れぬ力に圧倒され，抗す術もない」という感覚が少し和らぎ，「自分にも何かができそうだ」という感覚が生まれてくると，子どもはこれまでとは全く違うス

トーリーを作り始めます。そのストーリーの中核は，水との戦いであるように思えます。第１期の表現が，「砂嵐」とか「嵐」のような，漠として摑みがたいものに子どもが襲われ，子どもがそれに対してまったく無力であるというconfigurationの中で展開していたとすれば，この第２期の表現は，「水」という，やや明確な形をもつものに子どもが襲われ，子どもはそれに対して，それが何であるかを理解し，それに抗する力を持ち始めるというconfigurationの中で展開するように思えます。

箱庭３（図３）は，この時期の最初に彼が作ったものです。箱庭の木枠の上にラッパ手がいて，右側が海で，左側が陸地で，陸地の上には干拓用のブルドーザーが置かれています。先ず最初にラッパ手が，まるで新しい時代の幕開けを告げるかのように，「パンパカパーン，パパパパーン」と高らかに進軍の合図を吹き上げ，それとともに，ブルドーザーが力強く砂を海に向かって押しだし，大地を広げていく作業を開始します。そして，干拓の結果できたのは，湖でした。彼はその湖に自分の名前をつけます。（図４　箱庭４）。しかし，この水は，ある時は激しい洪水を起こして大地を呑み込んだり，次第に水量を増やして大地を脅かしたりするものとしてあらわれてきます。彼は，護岸工事を施して大地を守ろうとしたり，水門やダムを作って水量をコントロールしようとしますが，水量の増加はそれだけで防げるものではなくなります。

大人の場合も，自分自身の中の無意識的なものがせり上がってくると，「洪水に襲われる」「だんだん水の量が増えてきて，溺れそうになる」という夢がしばしば出てくるようですが，この時期の彼の表現の中心的テーマも，水量を増やし，自分を呑み込もうとする「水」でした。

そのうちに，彼は湖の中に山を作り始めます。（図５　箱庭５）。簡単に言うと，どんどん自分の内側のものが出てきて水量が増えていくので，同時に，生き延びるためにどんどん自分の背を高くしていかなくてはならないわけですね。彼の場合は，ここで高い山を作るわけですが，水量は箱庭なのでこのへんなのですけれど，本当はこの辺まで水量，洪水がきて，彼は懸命に高い山を作って，自分の自我というか，意識的な自我というものを高めていくという，そういう拮抗関係の中で自分の力をつけていくことをしていたように思います。

同時に，遊びの中でも，血なまぐさい，ドロドロとしたことばかりしていました。

例えば，玩具棚に置いてあった布製の男の子の人形を取り上げて，「眠り病にかかっている」と言って目を覚ますために床にたたきつけたり，目覚まし手術だといってナイフを突き刺して穴をあけたり，水を注射したりして，凄まじい勢いで，男の子の目を覚まそうとします。ちなみに，この「眠り病」という表現は子どもの表現の中に頻繁に出てくるテーマですね。自分の中に力があるのだけれど，それが活性化されない，逆に活力を奪われ，眠らされていて，口惜しくて口惜しくてしょうがない，叩きつけたり注射したり刺したりして目覚めさせようとするけどなかなか目覚めない・・・そういう経験を子どもが表現する時に，しばしば用いる表現であるような気がします。彼も，そういう経験をし，それをこのように表現していたのですが，その後，彼は，眠り病にかかった男の子に手術を施してから，それを丁寧にタオルで巻いて，プレイルームの外に持っていき，「ここでしばらく安静に！」とでもいうかのように，静かに土の中に埋めます。

この第二期の血みどろの時期に，次に現れたのは，金髪の女の子の人形でした。それはもう激しい攻撃にさらされました。彼は，短刀とかバットやハンマーでむちゃくちゃに突き刺したり殴りつけたり，手や足をバラバラにして，重たい積み木をその上に乗せて，その上にさらに弟を立たせて，「殺してしまえ！」「つぶしてしまえ！」と命じたり，水責めにしたり，水の中にさまざまな毒薬を混ぜて毒殺しようとしたり，髪を引き抜こうとしたり，水の中に入れたまんま上から重たいおもちゃを乗せて水責めにしたりということを，飽きずに繰り返していました（図６　女の子の人形）。

実は，この事例は私が大学院生の時に担当していたものですが，ある事例検討会で報告し，そこである先生に，この子には分裂病的な疑いがあるので，「これ以上，深入りするな」「この子の感情世界の中に深く入っていくな」「入っていったら底なしの泥沼にはまり込んでいくから，むしろ触らぬように触らぬように慎重に付き合っていってごらん」と言われました。今から考えれば納得のいく助言ですが，20代半ばの若い私には納得できないものでした。なんと言ったらいいのでしょうね，私は，逆に，「行けるところまで行こう！」というか，「僕が壊れるかもしれないけれど，僕が行けるところまで行ってみよう！」と決意するというような出来事が，この頃にありました。

一方，彼と私の間では，ある時期から，部屋の隅に大きな積み木でそれぞれに陣地を作って，お互いに，敵陣に向かってが何かを投げたり，弓矢を射ったり，ピストルで撃ったりして相手の陣地を破壊する激しい戦いが始まっていました。最初の頃は，彼は全然その戦闘に参加できないでいました。ピストルの音や機関銃の音がした

だけで部屋の隅に行って縮こまってしまったり，(弟は積極的に攻撃してくるけれど）彼は陣地の中に隠れて，敵に背を向けたまま暴発的に何かを投げているだけでしたが，次第に，私の陣地に向かってまっすぐに目を向け，自陣の砦の中にあけた小さな穴から私に向かって弓矢を放ってきたり，ものを投げてきたりするようになってきました。

そして，そのような戦いが頂点に達したある日，私たちは，プレイルームの中にある全てのおもちゃを投げ合って，相手の陣地を徹底的に破壊し尽くす遊びに夢中になっていました。そして，ハッと気がついた時には，どちらの陣地もこなごなに砕かれ，投げ合った玩具が部屋中に足の踏み場もないほど散乱し，「全てが崩れてしまった！」「全員が死んでしまった！」としか感じられない凄惨な光景が目の前に広がっていました。

私は，その瞬間，激しいめまいに襲われ，立っていられなくなりました。「ちょっと休ませて」と小声で伝えてから，しばらく床の上に突っ伏していました。「これが，この子の世界とつきあえる僕の限度なのかなあ」という思いがふっと頭の中をよぎりました。同時に「この子の感情世界の中に深く入っていくな」というある先生の助言もうっすらと頭の中をよぎりました。この子の心の底に潜む深い虚無感や絶望感に，私は，恐らく，この時，モロに曝されたのだと思います。

実は，私，昨年の夏の或る日，テレビを見ていました。恐らく中近東の状況を伝える報道番組だったと思うのですが，その時，突然，画面に「砂漠の中に死体が累々と横たわっている」映像があらわれ，それが私の目の中に飛び込み，わけもなく私の心を激しく揺さぶりました。「どこかで見た光景だな？」と思った瞬間，30数年前の，プレイルームの中のこの凄惨な場面に，ナマナマしく引き戻されました。プレイルームの中であの時に私の目の前に広がっていたのは，まさにこのような光景，「死体が累々と横たわる」このような光景だったのだと思い，からだがブルブル震えました。フラッシュバックというのはこういうものなのでしょうか？

そして，しばらくして，落ち着いてから，ああ，あの少年との出会いと，あの少年との間で起こったあの出来事は，私の中にこんなに強烈に残っていたのだと，気づかされました。

ところで，私が激しいめまいに襲われ，しばらく床の上に横たわっていた場面で，その後にこんなことが起こりました。私のめまいや動揺が少しおさまってきた頃，彼はそおっと私のそばにやってきて，まさに病人の枕元に座るかのように静かに座り，「先生，大丈夫だよ，みんな死んじゃったわけではないよ。このキューピーだけは一人だけ生き残ってるよ。」とささやきながら，キューピーの人形を私の目の前に差し出しました。この言葉は，今から考えてみても，私がこれまでに受けた「慰め」の中で，最も深く私を癒してくれたものの一つであったと思います。ちなみに，このキューピーは，この時の戦いで瀕死の重傷を負い，満身創痍となり，からだじゅうに真っ赤な絆創膏をはられるのですが，なんとか生き残り，やがて次の第3期で彼にとって重要な舞台となる地底都市で，その守護神として再登場することになります。

なお，この第2期でその後に展開した遊びのプロセスをごく簡単に述べておくと，上記のキューピーの艱難辛苦の生き残りの過程が進行するかたわらで，一方では，金髪の女の子の人形は死に絶え，先に述べた（眠り病にかかって，地下に埋められていた）男の子の人形に，女の子の心臓が移植され，この男の子も，いろいろな災難を蒙りながら生きのびていくという過程が進行していきました。自分の中の「女々しさ」を叩きつぶして，「男の子」として生まれ変わりたいという彼の苦闘がひしひしと感じられました。もっとも私自身も，当時，自分の中の女性性をどのように受け止めたらよいか苦しんでいましたので，この点に関しては同じような苦闘を共有していたことになります。

共存へ

このような「水びたしの世界」と「血みどろの世界」をくぐり抜けた後，彼の箱庭表現はがらりと変わります。第三期とも言うべきこの時期の最初に作った箱庭が，図7（箱庭6）です。

それまではいつも水浸しで，臭気さえ放っていた箱庭ですが，彼はこの回から，「ああいう湿った砂は嫌だ」と言って，乾いた砂しか使わなくなります。左上に置かれているのは，ガラモンという（赤い色の）怪獣とその家です。場面は，この怪獣を人間が飼っているというものです。怪獣の家の前には，食料が置かれています。右側のカネゴンという（青い色の）怪獣のしっぽと左下の（人間の住む）家の間は黄色いガス管でつながれ，怪獣のおならがガスとして人間の家に供給されています。それまでの彼にとって，怪獣は，彼を脅かし，彼を潰す存在だったのですが，ここでは，人間と怪獣の基本的関係が，生かし生かされる互恵的な関係に変わっています。同時に，怪獣が家を出て外を歩きだすと人間を踏み潰しかねないという危険も充分に認識し，「怪獣が外出する時は，人間は安全な地下に退避する」という，共存のための巧みな棲み分けの工夫がこらされていることにも注目しておき

たいと思います。

次の回の箱庭（図８　箱庭７）にも同じテーマが引き継がれます。ガラモンの家は中央上に移り，家の前には食料が置かれています。家の左右に，カネゴンとゴジラが護衛のように配されています。左のカネゴンは蝶ネクタイをしておしゃれ気取り，右のゴジラはバズーカ砲を持って守りを固めています。左下の赤い台は，本来はカネゴンの演説台なのですが，そこに突然「赤ちゃん」が指揮するダンプカー群に乗って大勢の人間が強盗に入ってきて，カネゴンを針で突っつき，逆にカネゴンに踏みつけられてしまい，謝って仲間に入れてもらうという事件が生じます。彼の箱庭の世界の「中」に初めて人間が登場し受け容れられるという画期的な事件でもありました。その後，赤ちゃんは音楽隊の指揮者になり，左下の赤い台の上で楽隊を何人も呼び寄せて音楽を演奏し，ガラモンの家の前には人がたくさん集まって輪になって踊り，ゴジラがバズーカ砲で祝砲を撃ちあげ，紙テープをとばし，ガラモンを家の外に出して，怪獣も人も一緒になって踊るという場面が展開します。図９　箱庭７（部分）は，ガラモンの家の前に人がたくさん集まって輪になって踊っている場面をズームアップしたものです。彼は「人間を踏み潰すなよ！」と何度も怪獣たちに注意を促し，同時に「さあ，クリスマスだ。みんなで踊ろう。ジングルベル，ジングルベル…」と，楽しそうに歌っていました。そして，夜が更けると，人間は怪獣の卵をお土産にもらって，トラックに乗って箱庭の外の世界に帰るのですが，怪獣はその後も賑やかに踊り続けるのでした。

人間の登場という新しいテーマを示したこの箱庭には，同時に，もう一つの重要なテーマが示されていました。実は，この箱庭の左側には，緑色の木が置かれ，右側には赤い色の木が置かれていたのですが，これについて彼は，「先生ね，左側から朝陽が昇るでしょ，だから，こちらの木はみんな新緑の色をしてるんだよ。そして，こちら（右側）に夕陽が沈んでいくから，こっちの木は夕陽に当たって，みんな赤っぽい色をしてるんだよ」と説明しました。プレイが終わった後に，私の尊敬する越智浩二郎さんという先輩に，「今日，彼がこんな箱庭を作ったんですよ」と話しかけると，越智さんが箱庭を見て，「あー，彼の中に時間が出現したんだね」とボソッとつぶやきました。確かに，上述のプレイの経過を振り返ってみれば，朝と夕方という時間の流れが出現するだけでなく，「夜更けに」は人間は姿を消して怪獣だけが活動するという時間的な棲み分けも，この時に出現していることが分かります。前の回では，怪獣が地上の世界に出てきたときは，人間が地下の世界に退避するという空間的な棲み分けによって，人間と怪獣の共存を可能にする構造が提起されたとすれば，この回には，さらに，昼間は人間，夜は怪獣というような時間的棲み分けによって両者が共存する可能性が開かれたことになります。

彼によって提示され，そして越智さんによって指摘された，この「時間の出現」という事象を，その後私はとても重要視するようになりました。例えば，我々が自分自身を捉えるフレームの中に「時間」が出現することが，自分を受け容れる重要な手がかりになることはしばしばありますよね。こうありたいと思う理想的な自己像との比較だけで自分の現状を捉える場合には，理想に届かぬダメな自分だけが見えてきますが，「自分は今はこうだけれど，少し経ったらこんな風になっているかもしれない」とか，「自分は，昔はこうだったけれど，今は少し進歩して，このようになっている」とか，「だから，もう少したったら，また少し進歩してるかもしれない」というように，自分を捉えるフレームの中に「時間」という軸が出現することによって，現在の，不完全で，欠点に満ちた私でもそれを受け容れることが可能になるという場合がしばしばあります。

子どもの表現世界の中に，上述のように「時間」が出現する時，同じように大きな内的変革が子どもの世界の中で起こっているように思えます。その後，私は，子どもの遊びの中に時間が出現した時，それに焦点を当て，それを強調してあげることによって，子どもの世界の中で生まれつつある新しい重要な過程を促進することを心がけるようになりました。上述の場合であれば，「ああ，こちらから朝陽が昇るので，みんな若々しい緑をしているんだね！」「こちらに夕陽が沈むから，木が赤い夕陽に照らされて赤くなるんだね！」「そして，怪獣だけが活動する夜が来て，そしてまた，ここから朝陽が昇って，朝が来るんだね！」と，子どもの世界の中にあらわれつつある「時間」に焦点を当てた応答をすることを心がけるようになりました。治療過程に関する「理論」は，このような的確な応答を支える重要な手がかりであると考えるようにもなりました。

地底の世界から地上の世界へ

彼の表現世界の中に「人間」が登場し，そして，これまでは恐れてきた怪獣との間に，「棲み分け」による共存・互恵関係が生まれてきた後，彼の関心は「地底世界」の探求と「地上世界」への帰還という新しいテーマに集中していきました。自分の内なる世界への探求が，より高次の安定したものになると，それは地下の世界への探

求というかたちをとるという議論がユング派の中にあるそうですが，彼の中でもそのようなことが起こっていたのかもしれません。

図10（箱庭８）は，この頃，彼が最初に作った地底都市です。海底火山の爆発にともなって姿をあらわした都市ということでした。左上の白い台の上にはキューピーと子豚が「西郷隆盛と犬」として置かれ，その横にはテレビを見る女の子と買い物かご（この空間は後に「学校」に変わる），右側には「僕の家」や城，そして中央下の高い台地には高い木がたっています。この木には，トマト，大根，バナナ，ブドウ等の果実や野菜だけでなく，ナイフやフォークまで実っており，日本に一本しかない貴重な文化財。その後，再度の海底火山の爆発とともに地底が隆起し，この都市が「地底の地底にいた怪獣とともに地上に出てくる」と表現したところを見ると，地底都市というよりは，彼がやっと描き出すことのできた平和で豊饒な地上都市のイメージと言えるかもしれません。ところで，左上に，この都市の守り神のように置かれたキューピーは，実は，さきほど述べた，私が激しいめまいに襲われた凄惨な戦場場面で，唯一の生き残りとしてあらわれたものです。瀕死の重傷を負いながら，なんとか生き残り，やっと全ての傷が癒えた時に，この場面に守護神のような役割を帯びて再登場したことになります。

そして，その後，彼はさらに本格的な地底の世界をつくります。図11（箱庭９）は，「最古の地底世界が地上にあらわれた光景」と言いながら，彼が作ったものです。中央やや左の赤い大木は，何億年前の木の柱が砂嵐で地上に出てきたもの，その左側には一億年前のワニ（実際はゴジラ），右側には，一億年前のマンモス（実際は象）と一億年前のネズミと一億年前のウサギ（実際はバルタン星人）がいます。砂は丁寧に整地され，不気味に静まりかえっています。

この頃の彼が遊びの中でしていたことは，この地底世界に棲む怪獣達を「生け捕り」にして，地上の世界に連れてくるという遊びでした。彼は，プレイルームの隅に，天井に届くほどうずたかく積み木を積み上げ，それを地底世界と地上世界をつなぐ狭い通路に見立て，「死の谷」あるいは「地獄谷」と呼んでいました。最初は麻酔銃を使って怪獣を眠らせ，怪獣を引きずって地獄谷を通り抜けようとするのですが，怪獣のからだが大きすぎてくぐり抜けることができません。次には，縮小銃なるものを考案し，それで怪獣を撃って怪獣のからだを小さくし，怪獣を小脇に抱えて地上に出ようとするのですが，途中で縮小銃の効き目が失せて怪獣が巨大なからだに戻り，命からがら地上世界に逃げ帰るという遊びを繰り返していました。怪獣を抱えたまま地上世界に帰還することがもう一歩で成功するところで，突然地獄谷が崩壊し，山崩れの波に呑み込まれて地底世界に引き戻され，ほうほうのていで地上世界によじ登るというような遊びも，繰り返していました。この頃から彼は学校に行き始めるのですが，図画の自由画の時間でも，「地底世界の探検に行ったときに地震が起こって，地底と地上をつなぐ通路が壊れかかり，人間たちが大慌てで地上世界に戻ろうとする」絵を描いていました。自分の心の奥底に棲む生命力の根源とも言うべきもの(それは,生命力やエネルギーの源でもあるが，同時に危険で怖いものでもあるようなのですが）を，地底世界から地上世界へと「生け捕り」にして持ち帰るという，心理療法過程でクライエントが最後にぶつかる最も困難な課題に挑んでいたのでしょう。

彼は，地底世界の怪獣たちをしっかり生け捕りにし，それをしっかり地上世界にもってくる場面をプレイルームの中で明確に表現したわけではないのですが，このようなプロセスが進行していくうちに，ある時期からプレイルームの外に出ていくようになり，同時にその頃，これまで「地獄谷」と呼んでいた空間を「消えた谷」と呼ぶようになりました。地底世界から地上世界へという苦渋に満ちたプロセスに終止符がうたれたように思えました。

「先生，今日は，おもてに行きたい！」と彼が言いだしてから，彼と私は構内のいろいろなところを探索しましたが，彼がもっとも深い関心を寄せたのは三四郎池でした。私は，この頃，何人もの子どもとこの池で遊びましたが，子どもにとって（そして私にとっても）これほど面白い空間はほかにありませんでした。そこは，木々に囲まれた窪みに秘やかな池があり，まわりの木立はいたるところに薄暗く不気味で謎めいた物陰を生み出し，場所によってはジャングルのように鬱蒼とした茂みや，大人にとっても登るのに苦労するほど険しい急峻の崖もあって，奥に踏み込んでみると，まるで異界に迷い込んだような恐れとときめきを感じるところでした。

彼を初めて三四郎池に案内した時，彼は狂喜し，「先生！僕はこういうところに来てみたかったんだ！」と興奮して叫び，木々に囲まれた暗い急峻な崖を，何回も何回も息を弾ませて登ったり滑り落ちたりしていました。彼にとっては，暗い静かな池は地底世界であり，暗い急峻な崖は「地獄谷」であり，そして，登り切った時に目の前に開ける明るい空間は地上世界そのものであるように見えました。

ある時，彼は池の端にたたずみ，じっと対岸を眺めてから，「先生，ここを渡ってみたい！」と言い出しまし

た。やや浅い部分ですが，泥沼にはまり込んで途中で動けなくなることは明らかなので,「それはなかなか難しいなあ」と私が言いますと，しばらく考え込んでから，「先生，何事もイチかバチかやってみなくちゃわかんないよ！」と反論してきます。私は迷いましたが，水深も浅いので，彼が足がはまって動けなくなっても何とか助けられるだろうと判断し，「じゃあやってごらん」と小さな声でつぶやくと，彼は恐る恐る足を踏み出し，ついに渡り切ってしまいます。対岸からぐるっと回って私のいるところに戻ってきた彼が，私の目を見つめて，「先生！人間，やっぱり，イチかバチかやってみなくちゃダメだよ！」と言い放った時の声の震えと表情は，今でも忘れられません。「怖かったー！」という引きつった表情と，「やった！」という喜びがゴチャマゼになってあらわれている，なんとも言えない声と表情でしたので。

少年の残した波紋

自分の来し方を振り返った時に，この少年との出会いがこんなに大きなウェイトをもって蘇ってくるとは考えてもいないことでしたが，しかし，よーく考えてみると，私はこの少年との出会いによって，あるいはこの少年との出会いを通して，いろいろなことにぶつかり，いろいろなことを体験し，いろいろなことを学んだのだと思います。

私がどうしてこの少年のことを思い浮かべたかという第一の理由は，先ほど，フラッシュバックの話をしましたけれど，彼の心の中の凄惨な風景をかいま見た時の，あの強烈な衝撃が，そのまま胸の中に残っていたからだと思います。当然そこには，自分の限界までいってみようという，若いときの私の「挑戦」という記憶がからんでいるのですが。

第二の理由は，プレイの中で子どもがどのように変容していくかに関して私がその後抱くことになった，次のような基本的な構図を，この少年が与えてくれたからだと思います。

最初の段階で子どもの前にあらわれてくる世界は，砂嵐のような，漠として摑みがたく，しかも圧倒的な力と大きさをもって，子どもに襲いかかるものである。それに対して，子どもは全く無力で，抗す術をもたない。第二の段階では，この圧倒的な力は，水や洪水という，やや形をもったものとしてあらわれる。対象の大きさと形と性質が少し見えてくるので，子どもはそれに抗する術を持ち始める。そして，基本的には，この大きな力（洪水）とのギリギリの拮抗関係の中で，子どもは自分の力を大きくせり上げていく。第三の段階では，彼が対面する世界は，明確なかたちをもった巨大な生き物（怪獣）としてあらわれる。それは依然として脅威的・暴力的な力をもっているが，時間と空間を棲み分けることによって共存できるものとなる。同時に，子どもは，この巨大な生き物のもつ力を自分のものとして統合することを試みる…というような構図です。

第三の理由は，この少年との出会いが，プレイセラピーにおける子どもの遊びの意味について深く考えていく決定的な契機になったことでしょう。この探求の過程で出会った大きな宝物の一つは，エリクソンの遊び理論でした。エリクソンは，子どもの「遊び」を，大人の「思考」と同じものと考え，それを，「事態を捉えるひな形を創造して，そこで過去の諸側面を再体験し，現在を再演し再生し，さらに未来を予測するという人間の生得的形成の幼児的形態を提供するもの」と定義します。言い換えれば，自分はこれまでどのような状況に置かれてきたか，現在どのような状況に置かれているのか，そして，この状況からどのようにして未来を切り開いていけるのかという探求を，事態のひな形を作り上げて，想像の世界の中でシミュレートする，そういう試みが遊びなんだと言うのです。それは，私にとっては，数ある遊び理論の中で，プレイルームの中で出会う遊びの意味を最も的確に浮き彫りにする定義のように思えました。例えば，「水を求めて砂漠をさまようが，砂嵐に巻き込まれて発見できずに，死んでしまう」という場面を何遍も飽きずに繰り返し表現していた時の彼は，今までの自分と今の自分がまさにそのような状況にあるということを，この表現を通して摑むという努力をしていたのだろうと思います。

エリクソンの遊びの定義のうち,「事態を捉えるひな形を創造して，そこで過去の諸側面を再体験する」という試みをあらわすものとしては，私は，いつも，津波による大災害に襲われた地域の子ども達が，被災後，「津波に襲われ，大波に呑み込まれて，死に瀕する」という遊びを飽きずに繰り返すという現象を思い浮かべてきました。彼らは，遊びの中で，恐ろしい経験を何度も再演することによって，「私はそういう災厄に襲われたのだ」ということを再体験し，先ず，それをはっきりと摑もうとしているのだと思います。「自分がどのような状況に置かれていたのか？」，それが分からないということが一番怖いことだからです。同時に，この反復的な遊びは，エリクソンがしばしば指摘するように，「僕は，何だか分からない大きな圧倒的な力に襲われて，ただそれに翻弄されるだけ」(passive suffering) という無力感を克服して，「僕は何が起こっているか分かっている。僕はそれに何とか対抗できる」(active mastery) という有能感を獲得しよ

うとする必死の試みをあらわしてもいるのでしょう。

子どもの遊びがもつ,「事態を捉えるひな形を創造して…現在を再演し再生する」試み，つまり「現在，自分の身に何が起こっているのかを理解し把握しようとする」行為の意味を考える時，私はいつも上田裕美さん（現・学生相談所）が昔会っていた学習障害の子ども（男児）の箱庭表現を思い浮かべてきました。箱庭の中に，幾つもの道路が縦横に走っているが，どの道路にも最終的には「進入禁止」の交通信号が立っていて，結局どこにも行けないという場面。彼の行動範囲が全て「ダメ」という札に囲まれているような雰囲気。多動な行動傾向をもつ彼は,「手を放せばどこに行ってしまうか分からない」という不安を周囲の大人の中に呼び起こし，恐らく，どこかに行こうと思えば「ダメ」と制止され，何かをしようとすればそれも「ダメ」と禁止され，結局自分のしたいことが何もできないという経験をしていたのでしょう。その後，彼はそれらの交通標識を一つ一つ取り除いていくことを箱庭の中でするのですが，この表現は，子どもが遊びの中で，自分の現状を把握し，希望のある未来を探し出そうと苦闘している姿を，極めてビビッドにあらわしているように思えます。

そして，子どもの遊びがもつ,「事態を捉えるひな形を創造して…未来を予測する」試み,「私の未来にある，ある希望を摑み取ろうとする」行為の意味を考えると，私はいつも，千葉大学に在職中に，学生さんが治療者的家庭教師として関わってくれた女児のことを思い浮かべます。幼児期からお母さんに虐待を受け，幼稚園でもいじめられて登園しなくなった彼女が，小学校入学後，不思議な表現をし始めます。先ず，箱庭の中央に一本の大きな黒い毒木を置く。毒の感染力は極めて強いので，周囲の生き物は死に絶え，他の生き物はみんな毒木に近寄らないようになる，という表現です。日常生活で彼女が発する言葉や，彼女が当時魅入られていた童話等から察すると，それは,「私の中に毒の木が存在し，そのために私はみんなに嫌われる」という強烈な感覚をあらわすように思えました。家庭教師の女子学生との深い接触の中で，この「私の中の毒木」に解毒作用が施され，彼女は次第に自分への信頼と他者への安心感を育んでいくのですが，ちょうどその頃，女子学生が教育実習のために，約一ヶ月間，会えなくなるというできごとが生じます。そして，この教育実習が始まる直前，彼女は，人形遊びの中で，「お姉ちゃんがいない間に，赤ちゃんは二歳になって，歩く練習をして，一人で歩けるようになっている」という物語をつくるんですね。実際に，一ヶ月間の実習の後に学生が彼女の家を再訪すると，それまでは学生の来訪を飢えるように心待ちにしていた彼女が，家にいません。母親と一緒に探しに出ると，近所の公園で，数人の友達と一緒に夢中になって遊んでいます。学生がその日に来訪するということもすっかり忘れていたようでした。「お姉ちゃんが帰ってくる頃，私は，お姉ちゃんの支えなしに，一人歩きができるようになっているよ」という，一ヶ月前の遊び表現が，そのまま現実生活の中に実現していたことになります。内なる毒木に苛まれていた少女は，このような希望に満ちた未来が訪れることを予感し，それを遊びの中で表現していたことになります。

遊びと笑いの共有

さて，さきほど述べた少年は，私との遊びの最終回,「先生はこれまで，こういうふうに変わってきたんだよ！」と言いながら，黒板に一連の絵を描きました（図12　先生の変化)。私は最初は「おたまじゃくし」（1）だったようです。そう言われれば，私，自分でも，最初はおたまじゃくしだったような気もしますが。それから一旦「たまご」（2）に返り，次は「顔だけのおばけ」（3)，その後に「天才（はじめは女だった)」（4）に。数式が並んだ，全身像が出てきます。その後にまた「たまご」（5）に返り,「人間」（6）に変わります。初めて人間らしい全身像が出てくるけれど，指はなく，逆立ちしています。次は,「自動車に轢かれて地獄で整形手術してハンサムな男」（7）になり,「地獄の大魔王に切られて，傷だらけの顔」（8）になったあと,「もっと高級な天才」（9）になります。「小学生時代の先生のからだ」と彼が言う全身像には，足し算だけなく，かけ算や未知数（X）などが現れてきます。

その次に再び小さなもの（「回転体子僧」(10)）に返ってから,「地図男」(11) になります。やわらかな曲線で描かれた初めての本格的な全身像ですが，地図男というように戯画化され，鼻水を垂らしている男の子という，あまり格好のよくない様相を呈しています。

次の「インドの地図男」(12) は，ずいぶん人間らしいかたちを帯びてきますが，その後，再び「おたまじゃくし」(13) に返ってから,「これが先生だ」と彼が言う像 (14) が登場します。それまでに描かれた像と比較すれば，さらに人間らしい雰囲気を漂わせるものになっていますが，同時に重要なことは，これまで断片的に登場してきた諸要素（例えば，回転体とか，インドとか，おたまじゃくしとか）が統合されて，一つの全身像ができていることでしょう。そして，彼が最後に描いた像は,「先生がおじいちゃんになったときの顔」(15)でした。夕べから，この顔，何度も見直してるんですが，なんか私に

似てますねえ，これ。インドもこんなにロマンチックな形に，立派に描いてもらって…。彼の気遣いに感謝しなければなりません。

ここに描かれた変態（メタモーフォシス）の過程は，彼が言うように「先生」の変化過程なのか，それとも「彼」自身の変化過程なのか，あるいは私たちが共有した変化過程なのか，微妙なところですが，しかし，この一連の絵は，心理療法場面における子どもの変容過程の骨格を私に教えてくれたように思います。時間の関係で詳しくは言いませんが，その過程は，①部分から全体へ向かう過程(顔や胴体という部分から，全身像へ)，②無機的なものから有機的なものへ向かう過程（数学的な直線的なものから，生きたからだをもつ曲線的なものへ)，③先行する部分がより大きな全体に統合されて，質的な変換を遂げていく過程，そして，④（質的な変換を遂げた後に，再びたまごやおたまじゃくしに返り，その後更に一段高い水準へ跳躍していくというように)進歩(progression)と退行(regression)を繰り返しながら変容し前進していく過程という，子どもの変容過程の骨格を教えてくれたような気がします。この時に彼が示唆してくれたこの発達観は，その後，私の中で変わることはありませんでした。

ところで，「先生がおじいちゃんになったときの顔」を描いた後，彼は，「…そして，先生は死んだんだよ」とつぶやきながら，「なんまいだー，なんまいだー」とお経を唱え，自分のペニス（インド！）を指でたたいて，「チーン，チーン」と鐘の音を真似して言って，この物語を終えます。

「先生」の死というこの表現は，この一連の絵が，先生の変化というよりは，先生の誕生から死に至るまでの一生涯を描いた物語であり，また，先生を葬り去ることによって彼が私との関係から巣立っていこうとする過程をあらわすものですが，同時に，私の心の中に最も強く残っている感覚は，この最期の時に，彼が自分のペニスを指でたたいて「チーン，チーン」と言って物語を終えるという，このユーモア溢れる表現が残した余韻なのです。この言葉は，別れの時が間近に迫り，複雑な思いの中で揺れる私の気持ちを一気に和ませ，何とも言えない笑いを呼び起こし，「元気でやっていけよ！」「元気でやっていこうな！」という前向きの気持ちにさせる不思議な言葉でした。

この言葉と，それが私の中に残した余韻は，ある意味で，私が彼との間で味わってきたものの本質を象徴しているように思えます。彼との付き合いの中には，確かに，先ほど述べたように，私自身が限界にさらされる等の苦しい経験が含まれていましたが，しかし，彼との遊び全体を振り返って見ると，そこで蘇ってくる感覚は，二人で一緒に，年がら年中，ケラケラと笑い転げていたという感覚なのです。

例えば，幼稚園くらいの子ども達を見ていると，二人の男の子があぐらをかいて向き合って，どちらかが「チンチン」とささやくだけで，二人ともゲラゲラ笑い出したり，あるいは，どちらかが「チン」と言っただけで，二人とも，もうおかしくておかしくて仕方がないという感じで，お腹を抱えて笑い転げているような場面，あるじゃないですか。この少年との付き合いに関して私の心の中に残っている印象は，まさに，このように，幼い子が二人だけで，「おかしくておかしくて仕方がないという感じで，お腹を抱えて笑い転げている」ような時間を共有してきたという印象なのです。そして，この印象こそが，この少年が私の心の中に深い刻印を残した最も大きな要因であるような気がするのです。「遊び」と「笑い」は，もしかすると，私にとっては，それがないと生きていけないと言えるほど重要なものであって，彼と遊んだ時間はその原型を私の心の中で灯し続けていたという気がするのです。特に，本郷近辺にきてからは，遊びと笑いが次第に乏しくなってきたかもしれないので…。

終わりに

これで最後のまとめにしますが，この事例は，その後の私の考え方や探求の方向をも決める重要なことをある方から示唆された事例でもありました。村瀬嘉代子先生という，私が心理臨床家として育つ過程で，最も深く頭を垂れて「有難うございました」と感謝したい方ですが，その村瀬先生に言われたことです。

少年との遊びが終わってから6，7年後，私は，彼との遊戯療法過程をもとに，私が考える遊戯療法過程論とでも言うべきものを書いて先生のところに伺いました。先生は，治療終了後の彼が，中学の成績も良くなく，高校も彼が願っていたところへは行けずに，しぶしぶと家業を継いだというその後のプロセスを取り上げ，「あなたの治療は，子どもの内的な変化だけを目指す治療の観点から見れば評価されるものかもしれないが，あなたはそれで満足しているの？」と問うてきました。「こんなに豊かな感性と表現力を持つ子どもが，その力を具体的に学校という社会的な場で充分に発揮し，自分の力にふさわしい進路を社会的な場で見いだしていくことに関して，あなたはどういう援助をしたのか？」と問われたのだと思います。村瀬先生ご自身は「当たり前のことを，ただ当たり前に指摘しただけ」であったと思いますが，私に

とっては，胸ぐらを摑まれて，「あなたは，こういう治療だけで，子どもへの充分な支援になっていると，本当に思っているのか？」と問いただされた思いがしました。

その論文を書いた頃，そして村瀬先生にそのようなことを言われた頃，私は千葉大という教員養成大学に奉職し，教師との関係や学校教育という文脈の中で子どものことを考えようとし始めていました。「単に子どもの内面的な成長をはかるだけではなくて，子どもの内面的成長やそこで現れてきた能力が，例えば学校という社会的な場でどのように発揮され，外側の世界とどのように嚙み合って展開し，子どものポテンシャリティがどのように社会的な場でも生かされていくかという，いわばその子の生活全体を視野に入れた臨床を」という先生の指摘は，年をおうごとにじわじわと私の視野の中に染みこんできたと言えるかもしれません。私はその後30年くらい，「学校臨床」と言われる領域でそれを自分の問題としてかかえ，つたない探求を続けてきた気がします。

子ども達に対する成長支援を学校という場の中でどのように的確になしうるのかというこの「問題」は，千葉大学の教え子達に突き上げられ，彼らとともに，そしてその後に出会った多くの仲間達とともに私が担った生きた問題であり，この問題へのコミットメントは私に恵まれた尊い運命だったと思いますが，しかし，同時に，どちらかと言えば夢見がちな個性をもって生まれた私にとっては，常に厳しい現実に向き合っていなければならないという意味で「辛い仕事」，あるいは自分の中の劣等機能を使って付き合わなければいけない「苦しい仕事」でもあったような気がします。よき仲間達に支えられて，なんとか30年ちかくそれをやってこられましたが，今は，また，私らしい，ファンタジー溢れる世界，遊びと笑いに満ちた世界にもう一度先祖返りをしてみたいという気持ちも湧いてきています。還暦という言葉そのものが暗示するように…！

長い間ふつつかな私に付き合っていただきまして，本当にありがとうございました。

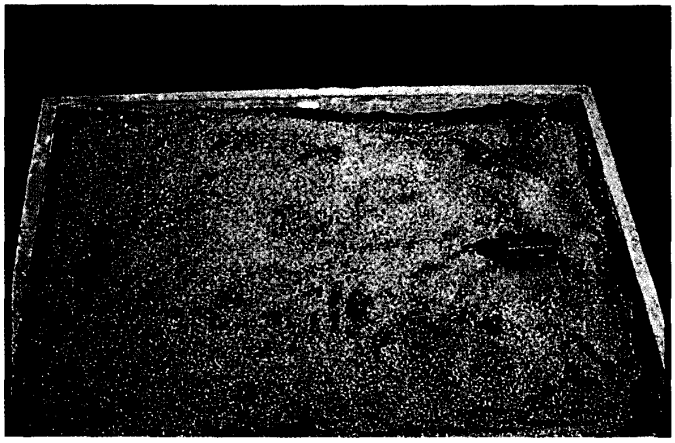


図1　箱　　庭(1)

図2　箱　　庭(2)

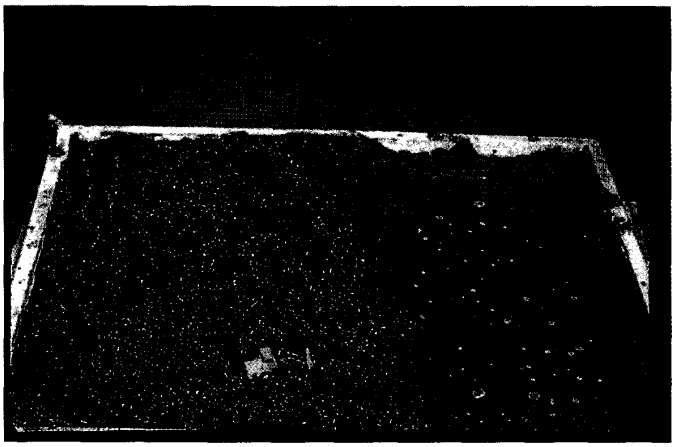


図3　箱　　庭(3)

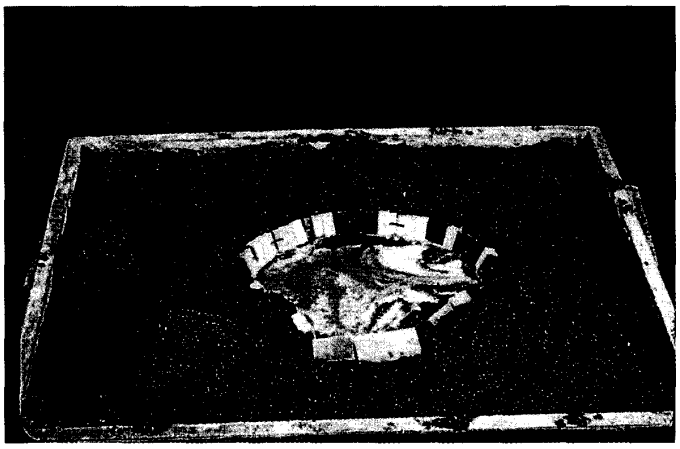


図4　箱　　庭(4)

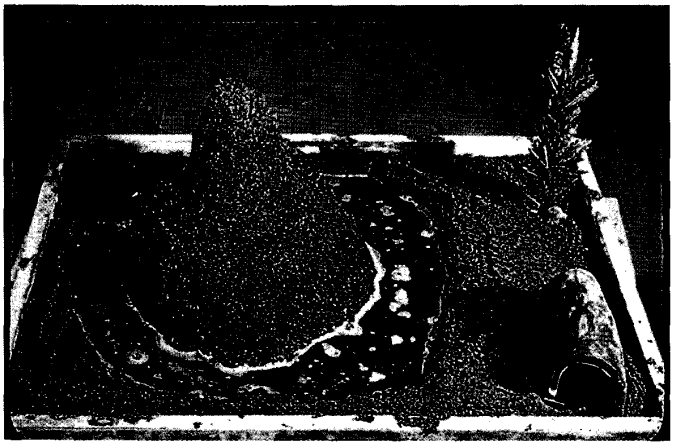


図5　箱　　庭(5)

図6　女の子の人形

図7　箱　　庭(6)

図8　箱　　庭(7)

図9　箱　庭(7)(部分)

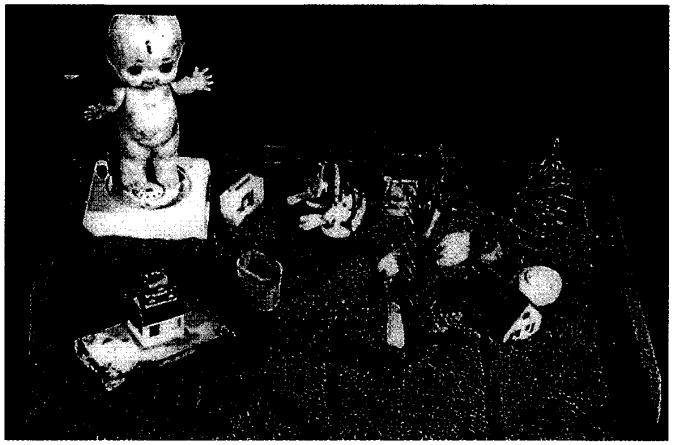


図10　箱　　庭(8)

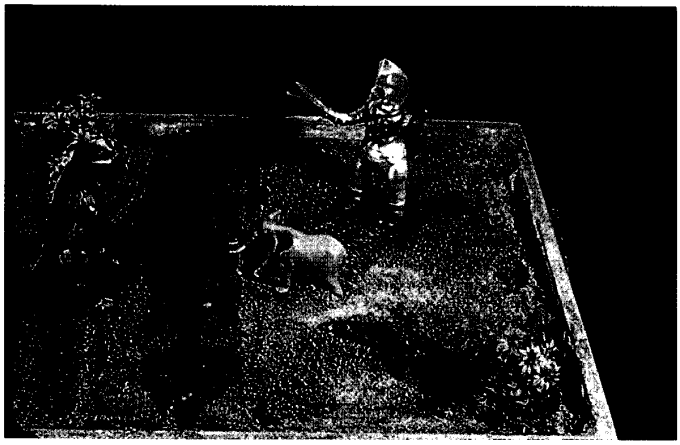


図11　箱　　庭(9)

図 12　先生の変化

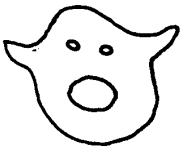
1

おたまじゃくし（おなかの中

2

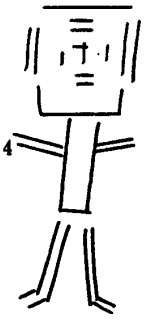
たまごにかえる。

3



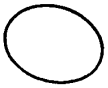
顔だけのおばけ

4



天才（はじめは女だった）

5



たまご

6

人間，指はない，逆立

7

自動車にひかれる

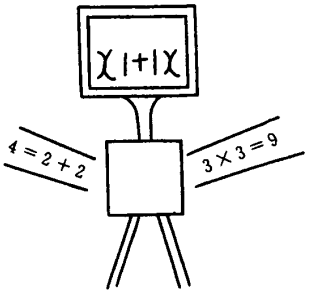
地獄で整形手術，ハンサム

8

地獄の大王に

切られる

9

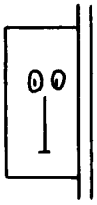


もっと高級な天才

先生のからだ

（小学生時代）

10



回転体子僧

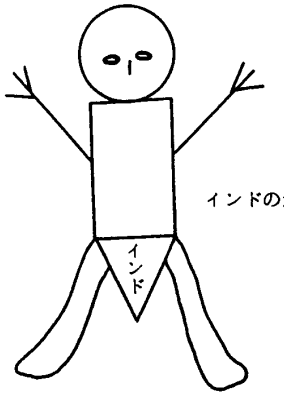
いつもグルグル

まわっている

11

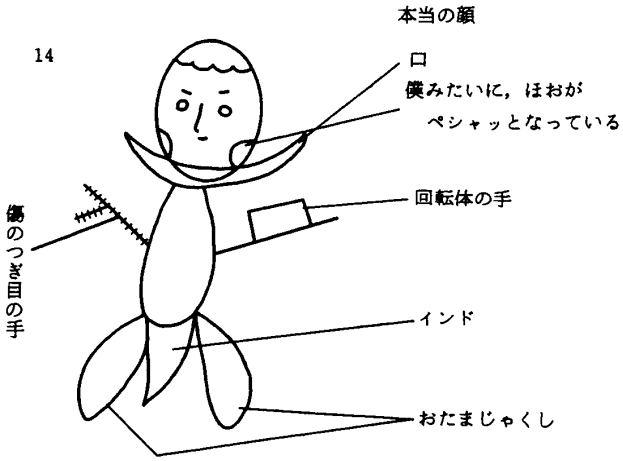
地図男，日本男

12

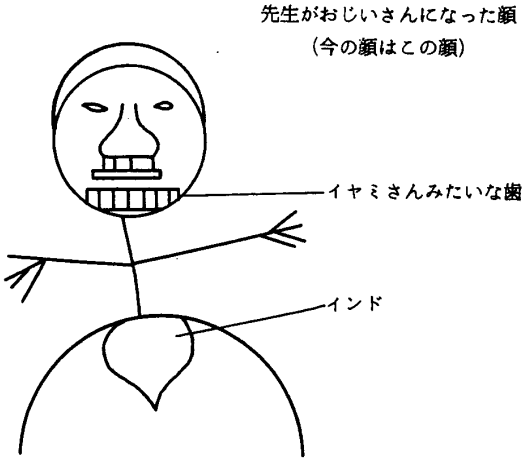


13

14



15



先生死んだ・なんまいだ・とQPを前に置いて

自分のPenisをたたいて「チンチン」